

旅する工具屋



最終話：旅をして思うこと。旅に向かわせるもの。

早いもので、連載 12 回目を迎えました。旅の思い出を書き綴ること約 1 年、今回は特定の国ではなく旅全体のことや日本に帰って思うことを取りあげ、これをまとめとして本エッセイも一区切りとさせて頂きたいと思います。

このエッセイ連載中も旅を続け、これまでに訪れた国は 45 か国になりました。この手の話で最も多い質問は「どこが一番良かった？」です。これに関しては過去の話で取り上げましたが、「なんでそんなに旅に出るの？」という質問がかなりの高確率で併せて投げ掛けられます。

かなり昔の青春 18 きっぷのポスターですが、「誰も私を知らない」というフレーズがありました。この短い言葉は私に強烈な印象を残していて、私が旅に出続ける答えでもあります。

日本で生まれ、育ち、働くうちに少なからず常識や経験則を身に纏うようになります。勿論それが無くては大人として暮らしていけませんし、必要なものだと思います。ですが、同時に着膨れで本来の身体や心の軽さが押し込まれているように感じることはないでしょうか。

そんな時、旅先の全く知らない言葉や常識や天気は、役に立たないものを容赦なく削ぎ落します。必要な常識や考え方はその場で獲得するしかありません。誰も私を知らない、私も何も知らないからこそ「再構築感」が私にとって旅の目的であり、悦びを感じる瞬間なのです。

当然、旅に出た後は帰らなくてははいけません。この「帰る」というのは、身体を飛行機に乗せて日本に戻すという物理的な意味と、考えや振る舞いを「日本モードに戻す」という 2 つの意味を含ませています。前者はほとんどの方が難くされているかと思いますが、後者は「頑張って旅先で構築したものを、消してしまうの？」と違和感を持たれるかもしれません。

旅先で獲得したものを、日本に帰った後でも自分の長所や武器として強く押し出している方は多くいると思います。確かに自分だけの体験は特別かもしれませんが、常に主張することで見失わずに済むのかもしれませんが、ですが個人的には相手と機会を選ばない主張は逆効果とも感じられます。自分の経験は減るものではありませんし、いつでも取り出せる場所に収納して活かそうなときにサッと出せたらいいかな、程度に考えています。



逆に私が違和感を覚え始めていることとして、謎の「日本人優秀説」があります。特に自分より年下の人と話していると、日本は外国人の憧れの対象なんですよ、とか日本人は常に注目を浴びている、などの出所の分からない話をよく耳にして驚くばかりです。

どうやら最近テレビやネット記事でそれらの話の元となる内容のものが増えているらしく、試しに見ると、日本に来た外国人がオーバーな仕事で驚いたり感動したりしてる様子や、他の番組は「外国で活躍する凄い日本人」を特集したりしています。

確かに自分も外国に行っている時は何気ないものにも異常に興味を示したり、感動するなあなどと共感する部分もあります。ですが大抵の場合、終盤になると何故か「日本はすごい」的なとてつもなく丸められた締めくくり方をされていて、ここに気持ちの悪さを感じました。

現状、世界観光ランキングで日本は10位にも入りません。外国人の観光客は他の国を退けて来日する明確な意思や目的があり、そんな彼らを相手に「日本に興味がありますか？」と尋ねるのは、まるで入社面接に来た人に「うちの会社に興味がありますか？」と聞いているのを見ているようです。同様に外国で活躍している凄い日本人は、「その人」が凄いのであって、決して私でもなければ私を除く全日本国民でもありません。

追い打ちをかけるように、関東の某国際空港最寄りのコンビニでガッカリする現場に出会いました。外国人の夫婦は長旅で疲弊した様子で、レジの店員さんにラテン訛りのラフな英語で「これは熟睡できるようになる飲み物？」と尋ねました。しかし、その手にはカフェイン満タンの強壮系ドリンクが握られていたのです。

確かに、目覚まし時計や眠そうな表情の人が描かれたボトルは知らない人が見たら眠るための飲料に見えるかもしれません。可笑しい場面に遭遇したな、と思っていると店員さんは照れ笑いを浮かべながら「え〜っと、うん、イエス」と答えました。一瞬で真顔に引き戻された私は急いで後ろから声をかけ、事なきを得ましたがさすがにガックリときました。

テレビや記事など、分かりやすく都合の良い「ほかの誰か」の言葉は、染み込みやすい反面で妄信的になりがちです。分かり切ったことでも、自分の足で踏み、眼で見て、舌で味わう実体験は本当の理解を与えてくれます。また、異国に降り立ち、再び母国に帰り立った時の清々しい気持ちや思い出を反芻した時の暖かな気持ちはありきたりの言葉では決して表せない宝物です。皆様も最低限の荷物と現金とパスポートだけをバックパックに詰めて、宝の眠る世界へと飛び込んでみませんか？



冒頭でも触れましたが「旅する工具屋」はこの第12話で筆を休ませて頂くことになりました。執筆の機会を与えて下さった方々、読み続けて下さった方々に厚く御礼申し上げます。また、どこかの空港や街で旅人と化した皆様と言葉を交わす日を楽しみにしております。

文：ペンネーム 17chandler